

疎外とアノミー

木下博道

一 課 題

よく知られているように、マルクスもデュルケームも、ともに19世紀におけるヨーロッパ近代社会の鋭い批判家であった。初期のマルクスが、当時の西欧社会の現実と鋭く対峙しながら「疎外」という概念を展開したことは周知のことであろうし、他方、デュルケームの提起した「アノミー」という概念が、近代社会の根底に含まれている危機に対する深刻な自覚に裏打ちされていたこともまた、ここであらためて述べるまでもあるまい。そして現代の社会学も、これら二人の社会学者が今日に残した「疎外」と「アノミー」という二つの概念を通じて、彼らの批判を継承しているといえることができる。とすれば、これらの概念は、それぞれどのような問題提起を含んでいるのか？そして今日、われわれは彼らの問題提起をどのように受けとめればよいのか？つまり、マルクスとデュルケームがそれぞれ「疎外」と「アノミー」という概念のうちに示した批判と洞察とを、今日の社会学はどのように生かすことができるのか、ということ——これを明らかにすることが本論稿の課題である。

二 疎 外

1. そこではじめに「疎外」という概念に考察を加えてみることにしたい。しかしそれにしても、社会科学の思考の道具としてこれほど重要な役割を担いながら、しかも時と場合に応じてこれほど多様な意味を付与される概念は稀であろう。この概念はむしろその曖昧さと多義性の故に好ん

で用いられるといった性格をもつのであって、極端な言い方をすれば、その意味はそれを用いる者の頭の数と同じだけある、とさえいえるかも知れない。1973年の *Current Sociology* にピーター・リュッツが「社会諸科学における概念としての疎外」¹⁾ という題名で、60ページ以上に及ぶ文献目録の付いた報告を書いているが、その中で彼は次のように述べている。

「哲学者、神学者、社会学者、心理学者、政治学者、および経済学者がこれまでこの言葉をどのように用いてきたかを検討してみれば、彼らが『疎外』という言葉によって何を意味するかに関して、おそらく最少限の合意にさえ達していないのではないと思われるのである。たとえ共通の理解があるとしても、それは極めて漠然としたものにすぎない。疎外という言葉はかくも多様な文脈の中で用いられるのであって、この用語は、いかなる科学的な意味においても、現代社会の特定現象を指示するものと見なすことは不可能である」²⁾。

じじつこの概念は、社会生活のほとんどすべての領域におけるありとあらゆる現象を対象となしうる——工場内の分業から大規模な官僚制組織の中の人間関係に至るまで、あるいは、選挙の際の投票行動から病院における神経症患者の行動に至るまで。かくも大きな多義性を孕んだ概念を考察するに際しては、あらかじめ議論の範囲に一定の制限を加えることが必要であろう。

ところで、今日の社会学においてこの概念がどのように用いられるかを考える場合、われわれはまず第一に、1959年にメルヴィン・シーマンによって書かれた「疎外の意味について」という論文を考慮に入れなければならないであろう。この論文はその後の疎外研究に一つの重要な方向付けを

1) Peter Ludz, "Alienation as a Concept in the Social Sciences," *Current Sociology*, Vol. 21, No. 1, 1973.

2) *ibid.*, pp. 24—5.

与えることになったからである。この有名な論文の中で、彼は自らの課題を次のように述べる。

「かくして課題は二重のものとなる、すなわち、社会学的思考における重大な伝統の一つにより体系的な意味を与えること、そして疎外に対する伝統的な関心を、明確な経験的定式化になじみやすいようにすることがそれである」³⁾。

つまり彼のねらいは、疎外という概念に付与されてきた多様な意味を整理し、そしてそれにまわりつくイデオロギー的色彩を取り除いて、実証的な研究と結びつけて論じることを可能ならしめるようにそれを再構成することにあったと考えることができる。そういう意図にもとづいて、彼は疎外という言葉に与えられてきた意味に五つのものを区別し、こうして構成される五つの概念 (powerlessness, meaninglessness, normlessness, isolation, および self-estrangement) に経験科学的な定式化を試みるのである。この論文がとくに産業社会学的諸研究が展開されていく過程において重要な意味を得るに至ったという事実の背景としては、次のような事情が指摘される。つまり、産業社会学の領域で、労働のもたらす否定的な諸結果に対する関心が次第に高まりを示しつつあったのが、ちょうどこの時期に当たっていたのである。1952年にはアセンブリー・ラインで働く労働者に関するウォーカーとゲストの著作⁴⁾が刊行されているし、その三年後には自動車組立て工の置かれた状況を克明に描いたE・チノイの著作⁵⁾が公けにされている。さらに1956年に出版されたフリードマンの『細分化された労働』⁶⁾をこれに加えれば、ここで言わんとする事柄の意味は明らかであろう。こうした関心の高まりを背景にして、これ以後、シーマンの影響を強く受けながら、疎外に関する実証的研究が盛んになされるようになるのである。そしてこの実証研究はいくつかの成果を生み出すに至った。その古典的なものの一つとして、われわれはロバート・ブラウナ

ーの *Alienation and Freedom*⁷⁾ を挙げなければならないまい。そこで本稿では、シーマン以降のアメリカ産業社会学における疎外の実証研究の一つの動向を示すものとしてブラウナーのこの著作をとり上げて、その中で展開される疎外概念と、マルクスによって構成されたそれとを比較対照させて問題の所在を明確にする、という手続きをとることにしたい。

2. 以上のように考察の範囲を著しく限定しても、なお疎外という概念の多義性は依然として残る。しかし少なくともこの概念によって指示される対象は、これによってある程度明瞭になる筈である。マルクスとブラウナーに限っていえば、それが含んでいる批判は明らかに、労働過程において人間の創造性や自発性を抑圧する拘束の契機に向けられている。いいかえれば、人間の労働過程においては、蜜蜂やクモのそれとは異なって、実際にモノを作るという肉体的な過程に先立って、作られたものをあらかじめ頭の中に表象として描くという精神的な過程が存在し、しかもこれこそが人間の労働に独自の性格を与える本質である、にも拘らず現実の労働がこの本質を実現していないという事実、そしてその結果、労働の内在的な特性よりもむしろそれに伴う外在的な結果の方が労働者にとってより大きな意味をもつという事実を、この概念は問題として把えるのである。人間の内的な欲求を何ら充足することのない労働——それが疎外概念の批判の対象に他ならない。

かくして『経済学・哲学草稿』の中でマルクスは、たとえば次のように述べる。労働における疎外の本質は「労働が労働者にとって外的であること、すなわち労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の

3) Melvin Seeman, "On the Meaning of Alienation," *American Sociological Review*, Vol. 24, 1959, pp. 783-91.

4) Charles Walker and Robert Guest, *The Man on the Assembly Line*, Harvard Univ. Press, 1952.

5) Ely Chinoy, *Automobile Workers and the American Dream*, Doubleday & Co., 1955.

6) Georges Friedmann, *Le travail en miettes*, 1956. (邦訳『細分化された労働』川島書店。)

7) Robert Blauner, *Alienation and Freedom*, The University of Chicago Press, 1964.

肉体は消耗し、彼の精神は頽廃化する、ということにある……そのため労働は、ある欲求の満足ではなく労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない」⁸⁾。そして他方、ブラウナーは、あたかもマルクスのこの言葉に呼応するかのよう、自動車工業に働く組立て工の置かれた状況を、次のように批判するのである。「自動車工業に雇用されている労働者、とくにアセンブリー・ラインで働く人達にとっては、労働の主要な意味は、給料の小切手と、そして高い賃金を伴う、かなり安定した仕事を与えてくれるよりよい仕事外の生活を営む機会であることが多い。仕事は目的のための手段であって、それ自体目的ではない、なぜならば、自動車工業における労働活動は根本的にやりがいのないものであるからである」⁹⁾。

3. とはいえ、捉えようとする問題は同じであるにも拘らず、その問題の把握の仕方においてマルクスとブラウナーとの間には決定的な相違がある。次にこの点を明らかにしたい。

第一の相違は、疎外という現象を説明する変数としてどのような要因を指定するかという点に関わる。筆者の理解にしたがえば、マルクスは疎外という現象の説明変数を生産技術の発達という要因のうちには求めなかった。彼が最も重要だと考えたものは、そうではなくて、生産手段の私的所有という事実であったのである。したがって、彼によれば、生産手段の私的所有とともに、肉体的労働に先行する精神的労働が資本の意志として労働者に対立するようになるときに生じるのが疎外であることになる。もちろん、マルクスも生産技術の発達がそれ自体として労働に及ぼす影響を知らなかった訳ではない。よく知られているように、『資本論』第一巻第四篇には、機械制大工場における労働とそれ以前のマニファクチャーにおけるそれとを対比させて、機械装置の発達にともなう労働過程の性格の変化を詳細に論じた叙述を見出すことができるのである。しかしマルクスの

場合、機械装置の発達は、マニファクチャーの段階ですでに労働過程のうちに潜在する資本主義的規定性を顕在化し、完成する二次的要因でしかない。つまりこの場合、生産技術の発達という要因はあくまでも生産手段の資本主義的所有という与件によって制約されたものとしてのそれであって、それはいわば豆腐のニガリの役割を果たすにすぎない。『資本論』のマルクスの叙述を引用しよう。

「労働者が労働条件を使用するということは、資本主義的生産が、単に労働過程であるのみではなく、同時に資本の価値増殖過程でもあるかぎり、すべての資本主義的生産に共通のことであるが、しかし、この顛倒是、機械装置をもって初めて技術的に明瞭な現実性を受取るのである」¹⁰⁾。

これに対してブラウナーにおいては、生産技術の発達という要因は、疎外の説明変数としてはるかに重大な役割を演じる。「一工業に独自の性格を付与する最も重要な一つの要因は、そのテクノロジーである」¹¹⁾ という前提が、そもそも彼の研究の出発点である。しかも重要なことは、この場合、彼がいう「テクノロジー」とは、生産手段の私的所有といういわば社会体制的な与件に制限されないという意味において体制外的なものとしてのそれであるということだ。こうしてブラウナーはテクノロジーの発展段階に応じて工業を四つの類型に分類して、その比較研究を行なうという方法をとるのである。

結局のところ、マルクスとブラウナーの第一の相違は次のように要約される。すなわち、マルクスが生産手段の私的所有という、社会体制的要因を疎外を生起させる決定的条件と考えたのに対して、ブラウナーはそうした社会体制から一応独立した「近代の工場テクノロジー」の生み出す問題として疎外を理解しようとする。しかもこの相違はきわめて重大な相違である、なぜならば、説明変数の選択をめぐるマルクスとブラウナーのこの対立をより高い抽象のレベルにまで引き上げてみれば、その対立の裏には、実をいえば、近代社

8) K. マルクス『経済学・哲学草稿』（城塚・田中訳 岩波文庫）91—2ページ。

9) Blauner, *op. cit.*, p. 119.

10) K. マルクス『資本論』（向坂逸郎訳 岩波文庫 第一巻(2)）407ページ。傍点は引用者。

11) Blauner, *op. cit.*, p. 6.

会を「資本主義社会」として把えるか、それとも「工業化社会」として把えるかという根本的な認識の対立が見い出される筈であるからだ。そして少なくとも本稿で考察の対象としている問題にかぎっていえば、「工業化社会」という概念化の方が妥当であろう、というのが筆者の見解である。社会主義社会と呼ばれている現実の社会にも同様の問題は存在するであろうという想定のは非に關しては、いまさしあたって議論するつもりはないし、またその必要もないであろう。ここではただ次の点を指摘しておけば充分である。第一に、所有関係の同一性は必ずしも工業的環境の多様性を排除するものではない。そして工業的環境が多様であればそれに応じて問題もまた多様な現われ方を示すのは当然であろう。ブラウナー自身の研究が示しているように、テクノロジーと人間との関係を、体制的与件から独立した変数として措定するという視角は、現実のこうした多様性を充分に踏まえた上で疎外という現象を分析するための有効な視角たりうるのである。これに加えて第二に、かりに所有関係が変わったとしても、それが直ちにテクノロジーと人間との関わりのある方を要するという理論的な保証はどこにも見い出しえない。体制的な与件の変動は後者の変化を伴わずに進行することもありうる。その場合、問題はそっくりそのままに残る。この点でもまた、ブラウナーの仮説の立て方の方が、はるかに大きな説明能力をもつことになる¹²⁾。以上の理由から、本稿では疎外を工業化社会の問題として考えたいと思う。

4. しかし、マルクスとブラウナーの相違はこれだけにはとどまらない。次に第二の相違について触れておきたい。

しばしば、疎外という概念は社会—心理的概念であるといわれる。それは、この概念が、人間の外部にある客体的な条件と、その内部にある主観的な意識状態とをともに記述する概念だからであ

る。けれどもマルクスは、疎外の客体的条件と主観的意識との間に明瞭な区別を設けていた訳ではなかった。むしろマルクスが問題にしたのは明らかに前者であって、自分が置かれた状況を労働者自身がどのように意識しているかという問題は詳しくは論じなかった。他方ブラウナーが取り上げたのはまさしく後者の問題である。ブラウナー自身の言葉を引用しておくことにしよう。

「疎外は、社会—技術的な環境と労働者との間のある種の関係から生ずる、複数の客観的条件並びに主観的意識状態から構成される一般的症候群である」¹³⁾。

実をいえば、このような問題設定の仕方はブラウナーの独創ではない。外部の観察者の目から見れば「疎外」された状況に置かれているように見える人間が、必ずしも「疎外」されているという意識をもたないこともありうるということ、したがって客観的な条件を問題にする前に、主観的な意識の問題として疎外を把握する必要があるということとは、すでにシーマンが指摘していたことであった。本稿の傍頭で触れた彼の論文が、「行為者自身の個人的な見地から」¹⁴⁾、いかえれば人間の内面的な心理状態の把握を可能ならしめる概念として、疎外を構成することをその一つの意図として含んでいたことは、ここであらためて述べるまでもあるまい。状況の外部にある観察者の下す判断と、その状況に置かれている主体の意識との間に乖離が存する可能性を承認するかぎり、こうしたシーマンの立論は、疎外を経験科学の対象たらしめるための必要な第一歩であった。そしてこの限りにおいては、ブラウナーはシーマンの取った手続きを——多少形を変えてではあるが——踏襲したにすぎない。したがってブラウナーに功績があるとすれば、それはむしろ、シーマンの立論をもとにして実証的な比較研究を行ない、それを通して、疎外を表わすとされる意識状態を生ずる客観的諸条件を詳細に分析しようとした、という点に求められるであろう。

12) つまり、所有関係を説明変数とするよりも、テクノロジーを説明変数とした方が、この場合には被説明変数との間に強い相関関係が見い出されるということである。(テクノロジーの発展段階と疎外との間の明確な対応関係を追認したものとしては、Jon M. Shepard, *Automation and Alienation*, The MIT Press, 1971, chap. 3 を参照。)そして、テクノロジーの発展と所有関係の如何との間には直接的には関連は見い出されない。

13) Blauner, *op. cit.*, p. 15.

14) Melvin Seeman, *op. cit.*, p. 784.

いずれにせよ、こういう見地から眺めれば、問題はかなり厄介な性格を帯びたものになる。というのは、意識状態としての疎外を規定するものとして、テクノロジーの発展段階とそれにもとづく作業の様式という要因を仮定するだけでは、説明がどうしても不十分なものに終わってしまうからである。じじつブラウナーが比較の対象としたのは印刷・繊維・自動車・および化学の四つの工業であるが、このうち繊維と自動車はテクノロジーの発展段階から見ればほぼ同じような水準にある。したがって作業様式の性格もさほど異なっていない。熟練工と非熟練工とでは多少事情は異なるが、大雑把に言えば、両工業のいずれをとってみても、労働者は労働のペースを自分で定めることはできないし、肉体的な運動の自由も、仕事のプレッシャーからの自由ももたない。マルクスの言葉を借りて言えば、「労働条件が労働者を使用する」という状況は、両者を共通に特徴づける事実である。にも拘らず意識状態としての疎外は両工業で著しく異なった様相を示すという事実が観察されるのである。とすれば、ブラウナーはこの相違を何によって説明しようとしたのか、という問題が残る。

ひとつには、繊維工業に雇用されている労働力が、大部分、移民・アメリカ南部の農村出身者・婦人といった人達によって構成されているという事情がある。そして、それ以前に工業で働いた経験をもたず、農村の労働習慣と生活水準に慣れていたこれらの人達にとっては、低い賃金や工場での拘束的労働でさえも、サブ・マージナルな農民としてのかつての地位と比較すれば明らかに一つの進歩であった。つまりは、繊維工業に雇用されている労働力のアスピレーションの水準の低さが、疎外を意識状態として現象することを妨げたと考えることができる。しかしそればかりではない。雇用される労働力それ自体のこうした性格の相違以外に、ブラウナーはもう一つの重要な要因を仮定しているのである。それは、フォーマルなものインフォーマルなものも含めて労働者が属している組織ないしは集団が示す規範的統合の度合いと、それに伴う労働者の帰属意識の有無で

ある。ブラウナー自身の叙述を引用すれば、「産業組織は規範的統合の度合いにおいて異なっているのであって、このことは凝集的なワーク・コミュニティへの労働者の帰属意識を確定するさいに重要である」¹⁵⁾。

こうして、フォーマルな規範体系に関する合意が存在せず、またアセンブリー・ラインの作業の性格上、インフォーマルな作業集団も形成されにくい自動車工業においては、労働者が帰属意識を抱くことができる集団——こういう集団ないしは組織のことをブラウナーは *industrial community* と呼んでいるが——は見い出されず、したがって疎外は強められた形で現象する。他方、繊維工業に関していえば、ブラウナーのいう意味における *industrial community* は必ずしも存在しないが、その工場の大部分がアメリカ南部の小さな町や村に位置する、という事情がある。そしてそこでは地方の *folk-community* が、個人の行動様式や社会関係を規制するとともに個人に帰属意識を与えるものとしてある。その故に疎外を生起させる客観的条件は指摘されうるにも拘らず、主観的意識としては現象することがない——というのがブラウナーの説明である。

ブラウナーが疎外に関して、たんにテクノロジーカルな問題という表現を用いず、ソシオ・テクノロジーカルな問題——もしくはテクノ・ソーシャルな問題という表現を用いる根拠はここに存する。すなわち、疎外は、一方ではテクノロジーの発展に伴う作業の断片化のもたらす現象であるとともに、他方では「産業的社会構造」の性格に関わる問題でもあるのだ。

ところで、私見によれば、規範が個人を規制する仕方や集団が個人を統合する仕方に関わる組織や集団の性格は、デュルケームが提起したアノミーという概念によって極めて明確にこれを捉えることができる。彼が展開したアノミーおよびエゴイズムという両概念は、集合的規制や統合の不在がもたらす事態に関する豊かな思考に満ちているのである。そこで次にアノミーという概念の考察に移ろう。

三 アノミー

1. 『社会分業論』ではじめて用いられ、その後『自殺論』で近代社会の病理を把える概念として本格的に展開されるデュルケームのこの概念は、いずれの場合においても、社会的規制の欠如にわれわれの注意を向ける。そしてこの限りにおいては、『分業論』と『自殺論』との間にさしたる相違はないように見える。『分業論』においては、それは社会を構成する「諸器官の間の関係が規制を受けていない」¹⁶⁾ 状態を意味し、他方『自殺論』においても、何らかの社会的危機にともなって生ずる欲求の脱規制状態（*dérèglement*）がアノミーとして扱えられるのである。——とはいえ、社会的規制の欠如がどのような文脈の中で論じられ、それがどのような理論的位置付けを与えられるかに関して、『分業論』と『自殺論』とは明らかに異なった認識を示すのであって、この相違を明確にしておくことが重要であろう。

まず第一に『分業論』においては、この概念は社会的諸器官の間の関係を指し示すにすぎないのに対して、『自殺論』においてはたんに社会の状態のみならず、個人の内面的な心理の状態をも記述する概念として展開される。したがって後者の場合、アノミーは二重の意味付けを受ける、というのは、ここでは病理は社会の病理であるとともに、社会生活を営んでいる具体的な個人に関わる病理でもあるからだ。こうして『自殺論』でデュルケームは、経済的な危機の際に観察される自殺率の急激な増大という現象を、この概念を用いて説明しようとするのである。正常な場合には社会が個人の欲求に及ぼす規制作用が危機に際しては攪乱され、その結果癒しがたい欲望が個人を無限のかたにまで引きずっていくようになるために自殺率の増大がもたらされる、というのがデュルケームがこの現象に対して与えた説明であることは、よく知られているとおりである。「社会的条

件と個人的心理状態との間の特殊な関係についての仮説をそなえた社会—心理的概念」¹⁷⁾ としてのアノミーは、こうして『自殺論』においてはじめて一つの理論として確立された、ということができる。

と同時に、こうした理論的深化に対応して、アノミーという概念がデュルケームの社会学理論の中で占める位置付けも異なったものとなる。『分業論』においては、アノミーはただたんに「異常な」分業形態として述べられているにすぎない。そしてアノミーが「異常な」分業の形態である、というデュルケームのこの認識の背後には、いうまでもなく、「正常な」状態のもとでは分業は連帯を生み出す、という前提が存する。実をいえば、まさにそれこそが「機械的連帯から有機的連帯へ」というシェーマを支えていた、『分業論』全体の基本的認識に他ならなかったのである。つまりここでは明白なオプチミズムが基調をなしているのであって、アノミーは、ちょうどあやまって喜劇の舞台に登場した悲劇の主人公のように見える。これに対して『自殺論』においては、アノミーは、宮島喬氏の言葉を借りていえば、近代社会の「構造的病理」¹⁸⁾ として把握されるようになる。デュルケームは、商工業の世界において進行する慢性的なアノミーについて語り始めるのだ。近代社会の問題性に対するデュルケームの深刻な意識は、このときにはじめて自覚されたといえるかも知れない。

2. ところで、社会的脱規制状態をこうした問題として把えるためには、一定の前提が必要であろう。なぜならば、社会的規制の不在が個人にとっての病理である、というためには、そもそもその実在が個人の正常な発達にとって必要な条件であるという認識がなければならないからである。そしてじじつデュルケームのうちにこうした認識があったことを示す傍証として『道徳教育論』——1902—03年にかけてソルボンヌ大学で行

16) Emile Durkheim, *De la division du travail social* (1893), 9e édition, Presses Universitaires de France, 1973, p. 360.

17) Steven Lukes, "Alienation and Anomie," in Peter Laslett & W. G. Runciman (eds.), *Philosophy, Politics and Society*, 2nd series, Oxford, 1969, p. 134.

18) 宮島喬「デュルケームの政治理論（上）」『思想』614号 1975年 63ページ。

なわれたデュルケームの講義の草稿——の中の次の一節を挙げることができよう。

「われわれが個人にとっての規律の有用性と必要性を強調するのは、それが個人の本質によって要求されているように思われるからである。規律は人間性が正常に実現されるための手段であって、その価値を低減させたり、それを破壊したりするための手段ではないのである」¹⁹⁾。

デュルケーム社会学においては、個人は社会的存在であるという命題は、こうしてきわめて根元的な意味を帯びる。社会はただたんに個人から独立した外在的拘束としてあるのみではない、その外在的拘束そのものによって個人を内在的に支えるものとしてある、というのである。社会的規制の解体を個人の内面に關わる問題として把えるデュルケームに独自の視点がここに認められよう。

しかし、筆者はなぜわざわざこのような言葉を引用するかという理由を述べなければなるまい。その理由は、こうしてデュルケームの問題認識の前提をたどっていった、それをマルクスの問題認識と対照させてみれば、一つの鮮やかな対比が得られると思われるからである。と同時に、これによって疎外ならびにアノミーという概念により明瞭な輪郭を与えることができるであろう。そこで『道徳教育論』から引用した以上のデュルケームの一節を、たとえば『ドイツ・イデオロギー』の中のマルクスの次の一節と比較してみればきわめて興味深い。

「共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずにどんな任意の部門においても修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。そしてまさにそれゆえに私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼ひ、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることはない」²⁰⁾。

もちろんこれは『ドイツ・イデオロギー』のマルクスの言葉にすぎず、後になって、マルクスがこうした、いわばユートピア的な理想を語ること

はなくなる。けれどもそのことは当面の問題ではない。筆者はここではただ次のことがいいたい。つまり、たとえばこの一節の中に示されているような、自己の可能性の実現を自由に追求することのできる人間を「理想」として前提するときにはじめて、この「理想」からのズレを含んだ現実の特殊な様態を「疎外」として把える問題認識が可能になるということだ。しかもこうしたマルクスの問題認識の前提とデュルケームのそれとの間には、明瞭な差異が認められるのである。というのは、以上の叙述から明らかなように、マルクスの目に問題として映じたものは、人間の自由な自己実現を妨げる拘束の存在であった。これに対してデュルケームの場合には、社会的拘束の存在はそれ自体何ら人間の本質と矛盾するものではない。むしろ、マルクスとは逆に、拘束の不在とそれがもたらす無秩序こそが彼の目には問題として映じるのである。

実をいえば、この議論は筆者の独創ではない。*Emile Durkheim* という600ページにも及ぶ学説研究を著したスティーヴン・ルークスというデュルケームの研究家が、ある小論文²¹⁾の中でこの問題を正面から取り上げているのであって、以上の叙述は彼の立論を忠実に再現してみせたにすぎない。彼によれば、デュルケームのアノミーという概念とマルクスの疎外という概念の基礎には、二つの対立する人間観が見い出されるという。つまり、マルクスの前提する人間は、自己実現を内的必然として要求する様々な可能性を備えた人間であって、こうした人間の可能性の実現に制限を加える拘束の契機が疎外として概念化される。他方、デュルケームの場合にはまさしくこの逆で、彼の前提する人間は、無際限の、それ故に制限と規制を必要とする欲求をもった人間であって、この規制の解体と拘束の不在がアノミーとして概念化される、というのである。ルークスは、デュルケームとマルクスのこの対比をさらに進めて、ホッブズやフロイトのうちに典型的に見られる思想的伝統とユートピア社会主義のうちに典型的に見られる思想的伝統との対立にまで結びつけて論じ

19) Durkheim, *L'éducation morale*, Nouvelle éd., P. U. F., 1963, p. 44.

20) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(古在由重訳 岩波文庫) 44ページ。

21) Steven Lukes, *op. cit.*

ている。

説明するまでもなく、これは問題を意識的に単純化した上での話にすぎない。おそらくマルクスのうちにデュルケームと同様の視角を見出すことは容易であろうし、他方デュルケームにもマルクスと似た問題認識を指摘することはさして困難ではない。とくにデュルケームに関していえば、彼の社会理論において社会的拘束という要素が占める重要性をあまりに強調すれば、「反近代の理論家＝デュルケーム」という過去になされた解釈の誤まりを再び繰り返すことになりかねない。こうした見解の一面性に関して、われわれはすでに多くの批判をもっているのである。

もう一つ注意すべきことは、疎外とアノミーの概念の前提をなすマルクスとデュルケームの人間観は相互に対立するものではあっても、必ずしも他と相容れないものではないということである。一方で自己の可能性を実現したいという欲求をもっと同時に、他方で集合規範によって規制を受けることを必要とする、という背反した二つのものが人間性のうちにはおそらく共存しているのであって、規範による規制は直ちに自己実現を妨げるものではなく、むしろそのための条件となりうるであろう。逆にいえば、規制の解体が自己実現に直ちに結びつくとは限らないのであって、アノミーと疎外とが同一の状況のうちに並存することもありうる。そして實際上、これらの問題はともに工業化社会に固有の問題として存在するであろう、というのが筆者の考えであるが、そのことを述べる前に、もう一つの点に触れておかねばならない。

3. さて、以上に説明したアノミーの問題は、デュルケームが『自殺論』で考察した問題のたんに一面にすぎない。忘れられがちではあるが、『自殺論』の説明の中でアノミーと等しい重要性をもつエゴイズムという概念に触れておく必要がある。次に取り上げたいと思うのは、デュルケームが展開したこれら両概念の関連如何という問題である。

アノミーが社会—心理的概念であることはすでに述べた。同じことはエゴイズムについてもいえる。アノミーの場合と同様に、ここでもまた、問題は社会的規範の構造と個人の心理的状态との動的な連関の中で把握され、展開されるのである。ただ、アノミーの場合に問題となるのが社会的「規制」(règlementation)の欠如であるのに対して、エゴイズムの概念において問題となるのは社会的「統合」(intégration)の喪失という事態である。デュルケームによれば、社会の不統合は個人の社会からの分離を促進し、その結果「個人が私利私欲に基礎をもつ行為準則以外の準則を認めなくなる状態」²²⁾が生ずる。この状態——いいかえれば、「社会的自我にさからい、それを犠牲にして個人的自我が度を超えて主張される状態」²³⁾をデュルケームはエゴイズムと名付けるのである。こうした問題把握の前提をなすものが、個人は社会的存在であるというデュルケームに独自の認識であることもアノミーの場合と同様である。違いがあるとすれば、ここでは社会は個人に規律を課すものとして現れるのではなく、個人がそれに結びつき、愛着を抱くことができるものとして現れるという点であろう。『道徳教育論』のデュルケーム自身の言葉を用いていえば、「個人は社会に結びつくことによってはじめて、真に完全なものとなることができ、その本質を十分に実現することができる」²⁴⁾のであり、それ故にエゴイズムは人間の本質に反する。こうして彼は宗教社会・家族社会・政治社会における統合の度合いと自殺率との相関を、エゴイズムという概念を用いて説明しようとするのである。

要約すれば、アノミーとエゴイズムの類似と相違は次のように言い表わされよう。両者はともに社会的規範の解体という同一の条件に依存し、この意味できわめて強い類縁性を示す。他方、両者の区別は、アノミーが「社会が個人を規制する様式」²⁴⁾に関わり、エゴイズムが「個人が社会に結びつく様式」²⁴⁾に関わる、という点に求められる。そして「規制」と「統合」という社会的規範の機能様式の相違に応じて、一方では脱規制化した欲

22) Durkheim, *Le suicide* (1897), P. U. F., 1973, p. 223.

23) Durkheim, *L'éducation morale*, p. 88.

24) *Le suicide*, p. 288.

求の狂奔に引きずられる個人の姿が、他方では集合的紐帯を喪失して孤独と不安に苛まれる個人の姿が指摘される、という相違が生ずることになる訳だ。

両者の区別は一見明瞭であるように見える。しかし実はこの区別は見かけよりもはるかに曖昧であって、デュルケーム以降のアノミー概念の展開をたどってみればアノミーとエゴイズムとの混同がしばしば見い出されるという事情は、そもそもデュルケーム自身における両者の区別の曖昧さに帰せられるのではないかと考えられるのである。じじつ、個人が集合体との結びつきを喪失すれば、彼の欲求を規制するものも当然なくなる。逆に社会的規制作用が弱まれば、個人は自己の利害に基礎をもつ行為準則にしたがって行動するようになるであろう。つまりアノミーを伴わないエゴイズムも、エゴイズムを伴わないアノミーも、ともに想定することが困難である。これらの状態は「同じ社会状態の異なった二つの側面」²⁵⁾である、とデュルケームが繰り返し述べる所以である。紙幅の制限上、詳しく紹介はしないが、W・ポープも、『自殺論』の叙述を細部にまで立ち入って考察した最近の著作²⁶⁾の中で同じ意味のことを述べている。デュルケームがエゴイズムの概念を用いて説明した現象をアノミーの概念を用いて説明することも可能であり、またその逆の操作も可能であることを示した上で、彼は両者を区別して考えるよりも統一して考えた方が好都合であろう、という結論を下すのであるが、ここでも同様の理由から、アノミーを社会的統合と規制とをともに包摂する概念として構想することを提案したいと思う。

もっとも、アノミーとエゴイズムが区別を設ける必要のないほど類似したものであれば、そもそも何故デュルケームは両者を区別しようとしたのか、という問題が残る。しかしこの問題を正面から取り扱うためには、デュルケームの説明を、彼が用いた自殺統計のデータとつき合わせて考察す

るという手続きがおそらく必要であろう。ここではこの厄介な問題は、今後の学説研究の一つの課題として示唆するにとどめたい。

4. それにしても『自殺論』において近代社会の根元的な危機の把握のための中心的な範疇として展開されたアノミーの概念を、その後デュルケームが次第に用いなくなるのはどのような理由によるのであろうか？ もっとも、1902年の『分業論』第二版への序言の中で、この概念は再び深刻な危機の自覚をともなって登場することになる。しかし第一に、1897年の『自殺論』刊行から1902年の『分業論』第二版への序言までの五年間をとってみても、この間にデュルケームが執筆した論稿の中でアノミーの理論が援用されているものは見当たらないようだし、のみならず1902年以降は、この言葉はデュルケームの著作からほとんど完全に姿を消してしまうのである。『自殺論』でデュルケーム社会学のうちに一個の理論として確たる位置を与えられたかに見えるアノミーの概念のこのような消滅は、ベルナル・ラクローフのいうように、たしかに「謎に満ちた消滅」²⁷⁾というべきであろう。

ラクローフはこうした事情について次のような説明を与えている。「1895年以降、デュルケームの関心の中心が変わる。彼はもはや分業や自殺のような特殊な社会的問題について考察しない。これ以後、彼は社会的なものの一般を研究の対象とするようになる。1895年に『社会学的方法の準則』を著すが、これによって彼は社会的なものの本質とその特質とに関する探求をせざるをえないようになった。こうして彼の思索は、この後、彼にとって本質的に社会的であるように見える道徳と宗教に向かうのである」²⁸⁾。つまりデュルケームの関心の焦点が「社会化される人間の理論」²⁹⁾から「人間を社会化するものの理想化」²⁹⁾へと移行していき、ちょうどその過程に対応してアノミーの理論が彼の社会学から姿を消していく、というのだ。

25) *Le suicide*, p. 325.

26) Whitney Pope, *Durkheim's 'Suicide'*, The University of Chicago Press, 1976. (とくに第一部.)

27) Bernard Lacroix, "Régulation et Anomie selon Durkheim", *Cahiers Internationaux de Sociologie*, Vol. 57, 1974, p. 288.

28) *ibid.*, p. 290.

29) *ibid.*, p. 291.

たしかにラクロワのこの説明は当を得たものではあろう。けれども、だからといって「危機」に対する認識そのものがデュルケーム社会学から完全になくなってしまふのだと断定することは、いささか早計であろう。たとえばオーストラリアのトーテミズムを分析したデュルケームの晩年の著作の結語において次のような叙述に遭遇する時、近代社会における秩序の不在を余すところなく描き出してみせた『自殺論』のデュルケームを思い起すのは、ひとり筆者のみであろうか。

「われわれが今日、将来の祝祭や宗教的儀式がどのようなものでありうるかを心に思い描くことに困難を覚えるのは、われわれが道徳的に凡庸な過渡期を経つつあるからである。我々の父祖たちを熱狂させた過去の偉大な諸々の事象は、われわれのうちに同じ熱情をかき立てない……それにも拘らず、それに取って代るべきものはいまだ何一つ形成されてはいないのである……一言でいえば、かつての神々は古びていき、あるいは死滅していく、そして新たな神々はまだ生れてはいないのである」³⁰⁾。

そしてこの言葉はそのまま、デュルケームが生きた時代の状況へとわれわれの目を向けるのである。とすれば、彼が学問活動に従事した19世紀後半から20世紀初頭へかけての第三共和制の時代は、どのような時代であったのであろうか。経済史のうえでは、この時代は、ちょうどフランスで工業化社会の輪郭が、大雑把ではあれ、ようやく整った時期にあたっていたように思われる。それはまた、その確立と同時に工業化社会に固有の諸問題が兆しを示しつつある時代でもあった。その中で生れてくる近代的個人が前近代への束縛を打ち破って自立しようとする際に生ずる集会的規範の解体という現象が、まさしくデュルケームが扱えた問題に他ならなかったのである。こうしてデュルケームの問題は工業化社会の問題として考えることができるであろう。

ただし、アノミーを工業化社会の問題として規定するに際しては一定の留保が必要であらう。というのは、この問題は一面でフランス文化の特殊

性と深く関わる性格を孕んでいるからである。人と人との関係のあり方、したがって集団や組織のあり方がいかに強い文化的規定を帯びていることは、たとえばミシュル・クロジエの『官僚制現象』³¹⁾が十分にこれを明らかにしている。綿密な調査にもとづいて書かれたこの著作は、フランスの官僚制組織の特徴がフランス社会に固有の傾向と密接に結びついていることを、鮮明に示してくれる。フランスの組織では、たとえばアメリカの組織とは異なって、インフォーマルな集団がほとんど皆無に近いという状況は、他人の権威やリーダーシップを受け入れることを極端に嫌い、他者とのインターパーソナルな関係を求めるよりはむしろ孤立することを選ぶといった強い個人主義的な態度を考えずには理解しえない。そしてアノミーがフランス社会のこうした特殊性と結びついていることは、およそ疑うことができないのである。にも拘らず、というよりもむしろそれ故に、デュルケームが工業化社会に——程度の差はあれ——普遍的にみとめられる一般的傾向を洞察することができた、という点も見逃してはなるまい。ブラウナーが取り上げた繊維工業において見られるような、同質的で統合度の高いフォーク・コミュニティの工業的環境との並存は、おそらく例外的な状況であらう。少なくとも、こうした状況は、より近代的な多数の諸工業の置かれた状況と著しい対照をなすものであろう。一般に、前近代の束縛から解放されて独立の人格を認められた、自由な契約の主体を前提として成立するのが近代工業化社会である。そしてこうした社会の問題を考えようとする際には、アメリカ南部の繊維工業ではなく、規範的統合の欠如によって特徴づけられる自動車工業のような工業を典型として思い浮かべる方がより妥当であるように思われるのである。

四 結 語

本稿では、マルクスとデュルケームがそれぞれ提起した疎外およびアノミーの概念をめぐって考

30) Emile Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse* (1912), 5e édition, P. U. F., 1968, pp. 610-11.

31) Michel Crozier, *The Bureaucratic Phenomenon*, The University of Chicago Press, 1964.

察を展開してきた。これらの概念は、今日の社会の含んでいる問題を考える際にも、なおその有効性を失わないものであるといえる。もっとも、現代社会の直面している状況は、ある意味では彼らが考えていたよりもはるかに複雑なものかも知れない。たとえば疎外についていえば、その後のテクノロジーの発展とそれによってもたらされた事態はマルクスの予見を超えるものであった。本格的な流れ作業が出現したのはようやく20世紀へ入ってから後のことである。そして極限にまで単純化され、「細分化」された労働が深刻な問題を伴って現れるようになったのは比較的最近のことにはすぎない。とはいえ、疎外という概念のうちに含められたマルクスの洞察そのものは、こうした「細分化された労働」の問題を考える場合にも多に生かすことができるであろう。

もちろん、労働が苦しみを伴わないものであった時代はこれまでなかったに違いない。そういう意味では、過去の時代においては労働は今よりもはるかに大きな苦役であったといえるかも知れない。この点については、機械技術の発達に関して悲観的な見方をすべき理由はどこにも見当たらない。しかし他方、かつては一個の腕時計を一人

で完全に組み立てることができた時計職人が、いまでは一分間に何回となく同じ作業を繰り返す多数の半熟練工に取って代られつつあるというのもまた事実であり、問題はここに存するのである。

他方アノミーもまた、国の文化によって程度の差はあるとはいえ、依然として今日の問題であることに変わりはない。個人がしっかりと結びつくことができる集団が確固とした形では存在しないという状況は、いまだに克服されたとはいえないのである。そして、個人が、帰属を求めることのできる集団をもたず、しかも労働の極度の細分化によって自己実現の可能性を奪い去られてしまうところで、いいかえればアノミーと疎外とが同時に並存するところで、工業化社会の含む問題は最も典型的な姿をとって現われるであろう——というのが、今のところ筆者が提出することのできる唯一の仮説である。それがどのような具体的な形態をとるかということは、今後の研究課題として残された問題である。ここではただ、デュルケームとマルクスがわれわれに残した概念を用いてどのような問題提起をすることができるかを示したいと思ったにすぎない³²⁾。

32) 誤解のないように断っておけば、筆者は本稿における問題提起の仕方が唯一の可能なものだと考えている訳ではない。とくに、マルクス以降に展開される疎外概念がほぼ工業の領域にのみ関わる概念であり、これに対してアノミーが元来は全体社会に関わる概念である、という概念の性格上の相違は両概念の統合を企てる際に忘れてはならないものであろう。